

第12回 「ことば」フォーラム

## 新聞の漢字

2002年10月25日（土）

朝日新聞大阪本社 アサコム・サブホール

小椋 秀樹（国立国語研究所）

大堀 泉（朝日新聞社）

笹原 宏之（国立国語研究所）

山田 貞雄（国立国語研究所）

道浦 俊彦（読売テレビ）

あいさつ 須藤 <sup>ひさお</sup>久士（朝日新聞社）

共催：日本新聞協会関西用語懇談会

独立行政法人 国立国語研究所

## 【あいさつ・趣旨説明】

司会（横山 詔一）日本新聞協会関西用語懇談会との共催によりまして、第12回の「ことば」フォーラムを開催させていただきます。たくさんの方においでいただきまして、誠にありがとうございます。今日のフォーラムは、「新聞の漢字」についてということで、お話をさせていただくわけですが、実は私ども国立国語研究所では、昭和41年、今から大体35年から36年前、1966年に新聞の漢字についての調査を行いました。そのときは、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の三つの新聞につきまして、どのような漢字が何回ぐらい使われているかということ、電子計算機を用いまして、今の言葉で言うと、コンピューターを利用して、調査いたしました。昭和41年当時、1966年と申しますと、まだ日本にもコンピューターがほとんど無いと、そういう時代でございました。当時コンピューターは、日本語を扱うことができない、特にコンピューターで漢字を処理することなどは、とても無理だというふうに考えられておりました。ですから、大蔵省の主計局の係員が、国立国語研究所にコンピューターを導入して、新聞の漢字についての調査を行う、そのような予算は、まったくプロジェクトが成功するとは考えられないということで、なかなか予算がつかないという状況にありました。ですが、日本新聞協会の、非常に多大なお力添えによりまして、ついに大蔵省も国語研究所に電子計算機を導入するというふうな予算を認めることになりました。その結果、世界で初めて、大規模な漢字仮名交じりのデータをコンピューターで処理することに、私どもの研究所が成功したわけです。つまり今の、たとえば携帯とか電子メールで、コンピューターを使って日本語の漢字を使っていろいろなコミュニケーションができる、その一番の基礎を、日本新聞協会と、国語研究所の協力関係のもとで築いたと、まさにプロジェクトX、その成功の礎がそこにあったというふうな歴史になります。その後、日本新聞協会さんとは、大きなプロジェクトの関係はちょっと途絶えたんですが、2000年から私どもの研究所で、このような「ことば」フォーラムというものを始めました。そこに朝日新聞の大宅貴子さんとかが参加してくださいまして、それが契機となり、去年仙台でもこのようなフォーラムを開いたわけですが、そこにもいろいろ新聞協会の方にお越しいただきました。そして今年6月19日に国語研究所で、やはり同じ「新聞の漢字」というフォーラムを開かせていただきました。国語研究所は東京にございますけれども、東京で「新聞の漢字」というフォーラムを開きまして、そこでの出し物に磨きをかけまして、いよいよこの大阪に本番ということで私どもここにお邪魔した次第でございます。今日のフォーラムに

つきましては、これから御挨拶<sup>あいさつ</sup>いただきますけれども、須藤久士様初め、新聞協会、関西用語懇談会の皆様には、非常なお力添えをいただきました。36年間の時間を経て、新聞関係者の皆様と、新たな協力関係が築かれる、このことについて、私どもは非常に名誉に思っております。どうぞ皆様、これからも国立国語研究所、ならびに新聞協会をよろしくお願い申し上げる次第です。御挨拶に代えさせていただきます。では続きまして須藤久士様に一言、御挨拶をいただきます。お願いいたします。

**須藤** ただ今御紹介いただきました、朝日新聞の須藤でございます。本日はたくさんの皆様、ようこそおいでくださいました。今もお話の中に出てまいりました、用語懇談会という組織なんですけれども、言葉を用いると書きまして用語、それに関して、新聞各社が話し合うという場を持っております。新聞協会に加盟しております新聞社、通信社、それから放送各社が、それぞれのところで、たとえば常用漢字に対して、新聞としてはどういふふうな対応をしていくのか、あるいは新しく出てきた外来語等に関してどのような表記をしていくのか、あるいは人権にかかわる言葉について、どのような考え方で対応していくのか。そういうことを新聞各社、あるいは放送各社は考えておりますが、それを新聞協会加盟社が、ほぼ月に1度、あるいは年に2回の総会というような形で集まりまして、協議をいたします。関西地区は新聞社が18社、放送が6社、計24社で関西地区新聞用語懇談会というものを形成しております。ただ今も12時半から常用漢字の表外字、難しい漢字についてどのように各社が対応しているのか、平仮名と漢字交じりの交ぜ書きでやっているのか、それを戻していこうとしているのか、あるいはルビの使い方をどうしているのか、等につきまして、アンケートをとり、議論をしてきたばかりでございます。本日はそういう話も入ってまいりまして、新聞の中の漢字の現状というようなことが、多々語られていくかと思えます。やや堅苦しい話もあるかと思えますが、大変面白く工夫されていると聞いております。どうぞ存分にお聴きいただいて、活発に御質問などいただければと思えます。よろしくお願いいたします。

**司会** それでは早速中身に入らせていただきます。最初は「漢字表って何だ？」という題名です。国立国語研究所の小椋秀樹と朝日新聞大阪本社編集局校閲部次長の大堀泉様に御協力をいただきます。

「漢字表ってなんだ？」小椋 秀樹 大堀 泉 (配布資料：p. 2～7)

小椋 国語研究所の小椋と申します。よろしく申し上げます。今日は「漢字表ってなんだ？」

という題で話をいたします。私はこちら（大阪）のほうの出身なんですけれども、東京に4年間行っておりますと、向こうのほうの言葉にだんだんと毒されてきまして、ちょっと大阪弁が中途半端になるかも知れませんが、「なんや変な大阪弁やな。」というふうに思うかも知れませんが、ちょっとそれは御勘弁いただきたいなと思います。まず「漢字表ってなんだ？」ということで、タイトルにもある漢字表について、御説明を申し上げます。その後漢字表の中でも、国が作成した漢字表としまして、先ほども出てきました、「常用漢字表」というものがございまして、それについてのお話をしたいと思います。続きまして、新聞の漢字表記の基準のことにつきまして、朝日新聞の大堀さんのほうから、新聞のいろんな裏話的なこともあるかも知れませんが、そういった話をさせていただくということになっております。こういった流れで話を進めて参ります。まず最初、資料は2ページ目から7ページ目になってますけれども、こちらのほうの資料に沿って話をすすめて参ります。一応前のほうにも、同じ様なものを出しておりますので、こちらのほうを御覧になりながら話を聞いていただくということも、できることになっております。まず、漢字の使用に関する問題ということで、話をさせていただきます。現代の国語は漢字仮名交じり文で書くことになっているわけです。これは別の言い方をすれば、漢字を使うということが前提となっているということです。そのため、例えば文章などを書くときに、ある単語を漢字で書くかどうかとか、漢字で書くとしても一体どんなふうな範囲の漢字を使うかということが問題になることがあります。そういった問題が関わっているだろうと思われる例として、こちらにもあげておりますけれども、資料2ページに、同じカード会社からきた手紙の例を挙げております。これは私の元に来たカード会社からの手紙でして、どこのカード会社とは申しませんが、ここのらびにある銀行さんの系列のカード会社です。どことは申しませんが、それで、同じ文面なんですけど、「御清祥」と「御清栄」だけは違うんですけども、後は同じ言葉、同じ単語が使われています。この冒頭部分です。しかしながら、「ますます」と「よろこび」に関して表記が違うということがあります。「ますます」というのは、(A)では漢字で使われているんですけども、(B)では平仮名で使われている。「よろこぶ」というのも、では、「慶」という字、我々が阪神タイガースの井川慶の慶ですね。(B)は、いわゆる一般に目にする「喜寿」の「喜」、これが使われているということです。こういうふうなことで、同じカード会社からきた手紙なんですけど、漢字表記に「ゆれ」が見られる。おそらく(A)を作った人と、(B)を作った人とで、漢字を使う基準とい

うものが、少し違っていたんだろうということが分かります。こういった問題というのは、割と日常生活の中でもふと迷ったりすることがある問題ではないかと思います。新聞などを読んでましても、平仮名とか、漢字平仮名の交ぜ書きになっている漢語であるとか、ルビが使われている、読み仮名が振られている漢字というものがあったりして、おそらく新聞社さんのほうでも、どういったふうに漢字を使っていくのかということで、やはり問題になることがあるようだということが分かるかと思います。では続きまして、漢字表とは、という 2 ページ目の話にいきますけれども、このタイトルにもある、漢字表とは一体何だろうかということですが、漢字表というのは、簡単に申し上げればここにも書きましたように、漢字の一覧表ということですが、それに漢字の字形とか読みなどが示されているわけです。それでは、漢字表に示された漢字というのは、一体どういった漢字なんだろうか、ということですが、漢字には非常に多くの種類があるんですが、けれども、その中からある目的のために漢字の使用の目安を定めたり、学習する漢字の範囲を定めたりということがございます。そのようにして定められた漢字というのを、一覧表にしたのが、漢字表ということになるわけです。ですから漢字表にあげられた漢字というのは、漢字使用のあるいは、目的のために定められた漢字ということになります。ここで注意していただきたいのは、漢字表というのは必ず何か目的を持って作られているということです。この辺の目的という言葉が、漢字表では大事なことになってくるというふうに考えております。次にお手元の資料では 3 ページ目のほうに入ります。ここでは、国で定めた漢字表の話を見せていただきます。国の定めた漢字表としましては、先ほども話がありましたけれども、常用漢字というのがあるんですけれども、戦前からこういった漢字表を作ろうという話ですね。これは多くの漢字を使うというのは、教育とか生活上の負担になるという立場から、使う漢字を制限しようということで、漢字表の案が作られましたけれども、なかなかこれを実施するには至りませんでした。やはり強い反対があったわけですね。しかしながらここに書きましたように、昭和 21 年には当用漢字表というのが制定されました。これは 1850 字からなる漢字表でして、目的としては、法令とか公用文とか、新聞・雑誌なんかの一般社会で使う漢字の範囲を示したものであるということになっております。ですからこの場合、使用する漢字の範囲を示したものであるというふうにありますけれども、当用漢字表にない漢字は使わないという立場にたっているわけです。そういった意味では、使う漢字を制限しようという性格の強いものであるということになります。その結果、当用漢字表に挙げられた漢字とか、音訓で書き表せ

ないものは、別の語に書き換えるとか、あるいは交ぜ書きをするというようなことがおこなわれたわけです。当用漢字表というのは、一般に広く普及していたわけですがけれども、定着したわけですがけれども、やはりその反面、こういった語の書換えであるとか、混ぜ書きに対する不満というのがあるわけです。そこでより適切なもの、いいものを作ろうということで、常用漢字表というものが作られたわけです。常用漢字表というのは、前の画面にも示しましたように、昭和56年に制定されております。この漢字表は当用漢字表よりも、数が多くなってまして、1945字の漢字が示されております。それでは、常用漢字表がどういうものであるのかということ、目的は何なのかということ、ちょっと話をしていきます。まず常用漢字表の前文というのがあります。そこには常用漢字表の性格ということで、こういったことが書かれています。常用漢字表というのは、法令とか公用文書、新聞・雑誌などの一般の社会生活で用いる、そういったところを考えている、その場合の効率的で共通性の高い漢字を取めたんだ、というふうにあります。ですから常用漢字表というのは、あくまで一般の社会生活における漢字使用というものを念頭に作られているというわけです。また、分かりやすく通じやすい文章を書き表すための漢字使用の目安、というふうにあります。このことから、一般の社会生活の場において、分かり易い文章を書くためのものという、常用漢字表の目的が見えてくるかと思えます。続きまして、前書き、一部抜粋ですがけれども、挙げておきます。要点だけ見ていきますと、現在の常用漢字表というのは、あくまでも現在の国語を対象としたもので、専門分野であるとか、個人の表記にまで、そのことを及ぼそうとはしないものである、と。また固有名詞は対象にしていません、ということです。そして次はちょっと重要になってきますけれども、実際にこれを使うにあたっては、とりあえず事情に応じて、適切な考慮を加える余地があるという、そういった性格のものということが書かれています。ですからまとめますと、常用漢字表というのは、漢字使用の目安ということなんです。どういう目的で、その目安を作ったかといいますと、現在の国語というものを念頭において、そこでの分かりやすく、通じやすい文章を書く、実現するために作られたものということです。従いまして、専門分野であるとか、個々人の表記であるとか、固有名詞というのは、もともと対象にしていないという、そういったものであるわけです。このことを十分に押さえておく必要があるかと思えます。もうひとつ注意していただきたいのは、「目安」ということですね。当用漢字表は、先ほど申しましたように、漢字表にない漢字は使わないようにしようという立場のもので、かなり制限という意味合

いが強かったんですけれども、常用漢字表になりますと、あくまでも目安ということになっています。それだからこそ、先ほど「前書き」のところでも申しましたように、運用に当たっては、ここの事情に応じて適切な考慮を加える余地があるというふうに書かれていたわけです。たとえばある専門分野についての文章を書こうという場合に、必要に応じて常用漢字表外の漢字も補うことも許容しているということです。ただし、できる限り常用漢字表をとというのが、社会生活における漢字使用の基本だということは大切にしてほしいね、といった立場であるというふうに考えていただければと思います。

続きまして、常用漢字表の構成を見ていきたいと思います。常用漢字表というのは、「本表」と「付表」とからなっております。本表のほうは、常用漢字の字体であるとか、音訓といったものを一覧したものです。付表のほうは、あて字などを一覧したものとなっております。前に、あまり綺麗きれいじゃないんですけれども、挙げておきましたが、こういった体裁、これは1ページ目ですけれども、やっております。本表ですね。この資料のほうでも、7ページに同じものをあげております。本表のほうを見ていただきますと、漢字という欄があります。ここに常用漢字表に入れられた漢字、その字体があげられているわけです。当用漢字の場合には、字体表とか、音訓表というものがあつたんですけれども、常用漢字では、そういったものがすべて一緒になっているわけですね。だから漢字とありますけれども、これはどういう漢字かということが挙げられているばかりじゃなくて、こういった字体で、この常用漢字には認めてますよということ、つまり字体も示しているという立場です。部分的にかっこ書きで、いわゆる旧字体と呼ばれるものが入っていますけれども、これはこの字体を認めているというわけではありませんで、明治以来使われていた活字とのつながりを示すためにあげられたもの、亜という字は、旧字体だとかこういうふうなかっこ書きの字なんですけれども、常用漢字表のほうでは、左側のかっこ書きでないほうの字体で認めておりますといったことですね。音訓というのがありますけれども、常用漢字表で認められた各漢字の音とか訓が示されています。常用漢字表はどういう漢字を使うかということを示すだけでなく、このように、その漢字をどういう字体で使うかとか、どういう音訓で使うかということも示しているわけです。例という欄がありますけれども、そこには単語の例、たとえば亜という字の使われた単語の例というのがあげられているということです。付表のほうはこういったものが一覧にされてます。「明日」とか「小豆」なんていうのが挙げられているということです。冒頭で紹介した手紙の例で問題となった「益」であるとか「慶」であるとか「喜」

という漢字ですけれども、赤くなっている字のところですね。この三つの漢字を常用漢字表で見ても、いずれも常用漢字表には入っていません。ただし「益」という字は、音の「エキ」「ヤク」でしか認めておりません。「慶」という漢字には、「ケイ」という音しか認めておりません。一番最後の「喜」という字は、音では「キ」というのを認めて、訓では「よろこぶ」というのを認めているということになっております。従って、(A)の2文字は、それぞれ常用漢字表外の音訓が使われているということになるわけです。一方(B)のほうは、常用漢字表に従って書かれているということになるかと思えます。続きまして資料の4ページ目にお移りください。ここでは漢字使用に対する人々の意識と常用漢字表との関係について、少し見ていきたいというふうに思っています。平成7年の4月に文化庁が「国語に関する世論調査」というものを実施いたしました。冒頭部では、次のような質問が出されているわけです。前にも出しましたが、(A)は常用漢字表に入っていない、難しい漢字は使わないようにして、漢字と仮名を交ぜて書いたもの。(B)は漢字で書いてふりがなをつけたものです。あなたはどちらがよいと思えますか。そういった調査が行われています。常用漢字表では、当用漢字表よりも字数は増えているんですけれども、やはりこれを厳密に守るとすると、仮名書きにしなければならない漢語であるとか、平仮名と漢字の交ぜ書きにしなければならない漢語がでてきます。ここではこのような漢語に対して、人々はどのような意識をもっているのかを調べようとしているわけです。質問として打たれたのは、こういった組み合わせ、それぞれ「がくぜん」「ししゅう」「はくせい」「はたん」というのが、交ぜ書きとルビ付きで書かれているわけです。ちょっとここで皆さんにお尋ねしてみたいと思うんですけれども、皆さんそれぞれ、(A)の平仮名と漢字の交ぜ書きのほうがいいと思うか、あるいは(B)の難しい漢字であっても、漢字で書いてルビを振ったほうが、読み仮名を振ったほうがいいのか、どちらにお考えでしょうか。ちょっと手を挙げていただきたいと思えます。まず(A)のほう、交ぜ書きのほうがいいという方、いらっしゃいますでしょうか。手を挙げてください。10人ぐらいいらっしゃいます。ありがとうございました。(B)の読み仮名をつけたほうがいいという方、これはずいぶん、やはり多いかと思えます。ありがとうございました。そんなことはどちらでもいいよという方、いらっしゃいますでしょうか。もしいらっしゃったら。あ、そういう方もいらっしゃいますね。(A)のほうに対して、(B)のほうがいいという方が圧倒的に多いわけですが、世論調査でも同じ様な結果がでておまして、交ぜ書きのほうがいいという方は、35%ぐらい

なんですけれども、読み仮名付きのほうがいいよという方は57.1%と、過半数となっております。こういった交ぜ書きの単語というのは読みにくいか、分かりにくいという批判があるんですけども、やはりこういったことが、この世論調査からも窺<sup>うかが</sup>えるということになるかと思えます。さて、ここまで常用漢字表について、その目的、性格とか、こういった問題点なんかの話をしてきました。常用漢字表を厳密に守るとすると、こういった交ぜ書きの漢語の問題がでてきます。特に交ぜ書きの漢語については、読みにくいという批判的な意見を持つ人が多くいらっしゃるわけです。また常用漢字表というのは、専門分野であるとか、固有名詞などは対象としていません。したがって、常用漢字表を基本としつつもそれぞれ読みやすい、分かりやすい文章を実現するために、工夫をする余地があるということになるわけです。次に工夫の一例として、新聞において一体どういうふうに漢字使用の基準がなっているのか、作られているのかということ、大堀泉さんのほうにお話いただきたいと思えます。ちょっとバトンタッチいたします。

**大堀** 朝日新聞校閲部の大堀と申します。今日は皆さんたくさんおいでいただきありがとうございます。バトンタッチを受けまして、新聞の漢字表について、お話をづけさせていただきます。実際に常用漢字表というものがあって、じゃあ新聞ではどうするのかということになりますと、レジュメに沿ってお話をさせていただこうと思えますが、新聞の紙面には、最初に触れられたように、漢字はあるけれど、わざと平仮名で書いているもの、それから熟語なのに漢字と平仮名が交ざっているもの。(A)の形ですね。読み仮名をつけて使っているもの。こういうふうな3通りの使い方に分かれます。このようにいろいろな漢字の使い方があるのは、新聞各社もまたそれぞれ使う漢字の範囲を決めて、ルールに従って、表記しているからです。常用漢字表は一般の生活の中で使う漢字の目安として作られたものですが、実際には、漢字表の外の字で「表外字」と呼んでいる、それには入っていない漢字もよく見かけます。新聞も常用漢字表を目安にしてきたわけですが、実際に読者に分かりやすい書き方を求めて、各新聞社がそれぞれ漢字表を作っています。字体や仮名遣いなども検討して、基準を設ける部署を、各社決めています。これが、先ほど須藤のほうからも少し触れましたが、朝日新聞の場合は、用語幹事というセクションがあって、そこが担当しています。用語というのは、用いる語、ちょっと見えにくいですが、上の用語懇談会の用語で、幹事がいて、いわゆる宴会の幹事さんの幹事です。この仕事は、たとえば社内で、今申し上げましたように、どのような字を漢字表に加えるか、あるいはどんな読み方を加えるかといったようなことを、言

葉の使い方、あるいは漢字の使い方について、調べたりあるいはこういうふうにしませんか、という提案をしたりします。決定するのは用語委員会という形で、編集担当重役とか編集局長なども出て決めるわけですが、その事務方として、調べたりまとめたり、原案を作ったりするところとして、用語幹事というセクションがあります。結局そこで国語審議会や、たとえば新しい施策を発表したりしたときも、ではうちの社ではどういうふうにしようか、そのまま受け取るのか、あるいはそれなりの工夫を凝らすのか、そういうふうなことを考えて、国語に対する政策、大原則を企画立案することを担当しているセクションです。他の新聞社さんにも、もちろんありまして、用語委員会幹事と呼ばれたり、用語幹事と呼ばれたりします。そういうセクションをちゃんと新聞社もみんな独自で持っておりまして、そういう問題についてどうしようかということ、考えております。その後、新聞各社が加盟している新聞協会では、その用語幹事さんなどが集まって、用語懇談会が開かれるわけですが、ここで常用漢字表を基本にして、新聞全体で使える漢字の基準を作っております。各新聞社はそれを踏まえて、独自の工夫を盛り込んだ漢字表を作っています。記者はその漢字表に従って、記事を書きます。『朝日新聞の用語の手引』などに、その漢字表は盛り込まれておりまして、そのマニュアルを使って記者は毎日記事を書いております。各社の漢字表は、その新聞社が、分かりやすさと自分のところの読者をどのように考えるかによって、少しずつ違っています。各社とも、漢字表にない表外字、難しい漢字については、ある人の発言の内容など、どうしてもその字を使わないと表現できないときは、表外字を使って読み仮名を付ける形にしてみました。記者が書く他の文では、なるべく表外字を使わない工夫をしてきました。表外字を含んだ言葉を、交ぜ書きとか、平仮名に直しても、必ずしも読みやすくなるとは限らないからです。こういう目的で、一応漢字表を掲げているわけですね。そして今言った様に、交ぜ書きや平仮名にする事もあるんですけど、なるべく避けたいという目的で、新聞協会は漢字表をこのように決めております。次のページに移ります。新聞漢字表の一例として、今日はここで、朝日新聞のケースをあげさせていただきます。常用漢字表と朝日新聞の漢字表の流れを追ってみると次のようになるんですが、新聞協会の方の流れも合わせて見てみたいと思います。1981年に先ほど説明していただいた常用漢字表が出来たとき、新聞協会の用語懇談会は、そこから11字を除いて、代わりに6字を追加しました。朝日新聞もこれに従いました。ここに出ているものです。常用漢字表は1945字で、そこから11字を引き、6字を加えましたから、1940字が新聞の漢字表に入

っていました。除いた 11 字というのは、昭和 29 年 3 月の国語審議会が当用漢字補正案というのを報告したとき、削除すべき字としたものの中に入っていたものです。その次に 1989 年になりますと、朝日新聞は独自に 5 文字追加いたしました。手元の資料の中にある、「冤」「腫」「腎」「豎」「拉」という五つです。このときに、朝日新聞ではどういうことがあったのか、当時の事を知る人に尋ねてみました。多分それは新聞にその言葉が頻繁にでるような事件があったというのがきっかけというのが、見ていただくと分かるかと思います。冤罪の「冤」。これは免田栄さんの再審請求の判決の頃から、死刑囚の再審請求の判決が続きましたので、冤罪という言葉が、紙面によくでるようになりました。免田さんの再審無罪判決というのは、83 年なんですけれども、この頃から毎年何件か、そういう再審請求などがありまして、無罪になったということで、冤罪という言葉が紙面にけっこうでるようになったんです。それから拉致の拉。これは古くは金大中氏の拉致事件。これがはっきり拉致であるというふうになったのが、76 年頃でして、その頃の紙面にしょっちゅう出たわけですが、このときは交ぜ書きでした。「金大中氏ら致」という言い方をされたことがあったんですが、金大中氏ら、で切ってしまうと、ら致というのは読みにくいというのは、その当時からありました。それが 87 年に、大韓航空機爆破事件で李恩恵が日本から拉致された女性であるという話がでたときに、またこれが紙面に何度も拉致という言葉が出ることになりまして、また交ぜ書きになると、やっぱり読みにくいという話がでてきました。それから「腫」と「腎」。腫瘍の腫と腎臓の腎なんですけど、これは当時の科学部長のほうから要望がでたと。骨肉腫とか、子宮筋腫などが、交ぜ書きでは読みにくいんですね。しかも死亡記事になりますと、ルビというわけにいきませんでしたから、読み仮名をつけて使うと字数がすごく増えてしまいます。やっぱりそれでは書きにくいということで、科学部長のほうからリクエストがありました。それから「豎」ですが、これは豎穴式住居というのが、縄文時代にあったということで、発掘、あるいは再現の記事がでています。縄文時代の豎穴式住居は、学会ではもちろん今の「豎」という文字の下の土が立になった字を使っておりまして、それまでは「糸偏に従う」つまり縦横の縦で代用できないかということも、だいぶ試みられたようですが、学会は一貫して下に立が付くほうの豎穴を書いておりまして、やはり代用は難しいということになりました。というような事情がいろいろあったようでして、つまり紙面によく出てくるようになったけれども、言い換え、あるいは文字の代用が利かないというものの代表として、これらの文字を追加して欲しいというものの中に挙がり、追加される

ことになります。その後、2001年に新聞協会は39字を追加しました。この追加したものは、ここにあげたとおりで、この中の腫と腎は、先ほど申し上げた事情で朝日新聞はすでに追加してしまっております。さらに2002年の新聞協会決定関連として、更に8字足しました。このときは読み仮名無しで熟語に使うという形で、この8文字を使うことにしています。また同時に朝日新聞は独自で更に21字も追加しております。したがって、現在朝日新聞の漢字表には2011字入っております。ただし、新聞協会が39字を追加したのは2001年なんですけれども、朝日新聞はそれを実現したのが2002年の春になってからです。今回どういうことになったのかということを見てみます。今回の漢字表の改訂、つまり2002年の春では次のようになります。今回の改訂では新聞協会も3年ほど検討しておられたようで、2001年にかなりの字数を追加しています。つまり39字ですね。朝日新聞では、1998年に読み仮名を付けるときに、言葉の後ろに丸かっこをつけて書いていたのですが、ルビ、つまり、横にふりがなをつけることができるようになって、ふりがなの形にすることにしました。ルビをつけて使える字を、専門用語、あるいは引用などに制限して、一般的な名詞で表外字を使った熟語などは、ルビを使う対象にはしませんでした。つまり何でもかんでも表外字を使ってルビをふればよいというふうにはしておりません。このときには多数の読者が読めそうな漢字について、ルビなしで使えるようにしようということで、漢字表の拡大を検討したのですが、朝日新聞だけの拡大とするのはやめて、新聞協会に対して、漢字表を拡大しましょうということで、再検討を要望しました。その後2001年に新聞協会が39字を追加した。更に朝日新聞は独自に21字を足して、2002年4月の漢字表ができたわけです。朝日新聞が独自に追加した21字については、新人記者と大学生にテストをしたんですね。その結果ですが、3月14日の特集面で「人名や地名でよく出てくるから馴染んでいる」とか、あるいは大学生を対象にテストしてみたが、おおむね好成績だったというふうに、一応テストした結果、これは追加してもいいだろうというふうに判断したものです。こういうテストなんかも、用語幹事などが中心になって行ったものです。今回の漢字表の改訂で、紙面に交ぜ書きというものがだいぶ減りました。また他の会社の動向ですが、毎日新聞さんが『毎日新聞用語集』をこの春に改訂なさいました。これは99年5月から読み仮名付きで先取りして使っておられたものを、読み仮名無しで使うという形にしています。それから読売新聞さんは、新聞協会の39字追加を受けて、2002年2月から使っています。産経新聞さんは同じく協会の追加を受けて、2001年の12月から使っています。それから共同

通信，記事を配信してくださる通信社ですね。共同通信が，2002年の3月に新聞協会に  
ならって39字を追加いたしましたので，そこから配信を受けることの多い地方紙，京都  
新聞さん，神戸新聞さん，中国新聞さんなど，地方紙も同じように39字を拡大した漢字  
表を使っています。このときに他社の動向をお伺いしてみますと，日本経済新聞さんも，  
産経新聞と同じときに39字を追加した新しい漢字表を使っています。それから読売新聞  
さんは，「拉致」の言葉については，協会は「拉致」という熟語の形ではよみがな無しで  
使いましょうというふうにしたんですが，読売さんはその後も「拉致」に読み仮名を付  
けておられました。ところが最近，御存じのように毎日のよう紙面に「拉致」がでてく  
ることになりますと，もうこれはさすがにつけておく必要はないだろうということで，  
もう読み仮名をやめようということで，おやめになりました。それから後，地方紙だと，  
ローカル色も当然あります。たとえば京都新聞さんは，「<sup>かわら</sup>瓦」屋根瓦の瓦ですね。それ  
から「<sup>かま</sup>釜」お茶の釜は，解禁する1年前，2001年からルビもなしで，読み仮名無しで  
そのまま使ってしまうと。あるいは祇園祭の<sup>ほこ</sup>鉦。山鉦の鉦，あれなどもう今更ルビを  
つけることもなかろうということで，伝統行事に関係するものは，独自に読み仮名無し  
で使っています。こういう形で新聞社も各社，読みやすく，自然な表記を求めて，漢字  
表にそれぞれの工夫を重ねて，今のような形で使わせていただいています。そういうこ  
とで，まとめは，また小椋さんにお返しいたします。

**小椋** どうもありがとうございました。最後のまとめのほうに行きますけれども，「漢字表  
ってなんだ？」ということで話をまとめてきました。ある目的の為に作られた漢字使用  
の目安であるとか，漢字学習の基準というのが漢字表ということになります。国が作成  
した漢字表の中には，常用漢字表というものがあまして，これは一般の社会生活にお  
いて分かりやすく通じやすい文章を書くための，漢字使用の目安であるということであ  
ります。それから新聞の漢字表記のことについては，今お話をいただきましたけれども，  
それぞれ新聞各社が定めた漢字表によって記事が書かれているということになっている  
わけです。新聞各社は常用漢字表を基本としながらも，読みやすい記事であるというも  
のを目指して，常用漢字表にあるものも，一部削ったり，あるいはそれ以外のものを追  
加したりということで，記事も作られているというわけであります。初めにもいいまし  
たように，現在の国語というのは，漢字仮名交じり文で書くのが普通であります。その  
ため，ある語を漢字で書くかどうかとか，漢字で書くにしてもどの範囲の漢字を使うの  
かということで迷うことがあります。こういった場合，たとえば常用漢字表であるとか，

新聞に使われている漢字というものを、自分自身参考に、あるいは目安として使おうという人も中にはいらっしゃるかもしれません。しかしながら、こういう場合、たとえば常用漢字表や新聞に使われている漢字を、自分自身で使う場合、そのときに注意してもらいたいのは、それぞれ目的とか対象というものがあって作られているんだということ、やはり十分押さえておいていただきたいということです。漢字表の目的とか、対象を十分理解した上で、一つの目安、一つの基準であるということで、作っていくということが、日常の言語生活の中で、こういった漢字表とうまく付きあうということにつながっていくのではないかと、あるいは漢字と上手くつき合うということにもつながるのではないかというふうに考えております。どうもありがとうございました。以上で終わらせていただきます。

**司会** お疲れ様でございました。聞いていただいている方にもお疲れさまと。ちょっとお話が硬いかなと思ったり、もう御存じ、こんなことなら今更という方もいらっしゃるかも知れませんが、どちらの方々に向けてもお疲れさまでございました。今度はもう少し話がマニアックになりまして、国語研究所の笹原宏之からお話申し上げます。彼は中学校のときから諸橋の『大漢和辞典』を買って欲しいと自分からねだって買ってもらったという、漢字少年と伺っております。あ、もと漢字少年ですね。

### 「新聞の漢字を調べる」笹原 宏之

(配布資料 : p. 8 ~14)

**笹原** 国語研究所の笹原と申します。よろしくお願ひします。今日は「新聞の漢字を調べる」ということで、新聞の漢字の調査方法とその調査をするとどうということが分かるのかということについてお話しいたしたいと存じます。新聞というと、紙面は漢字で埋め尽くされている、そういう印象があるかと思ひます。なにせ、新聞の1面全面に漢字を埋めると、1万2000文字になるということで、大変な数の文字が使われているわけです。その新聞の漢字というものは、新聞に使われている漢字ということで、正しい文字である、あるいは自分が文章を書くときに基準とするというような方もおいでのようです。ここでは、新聞でどのような漢字が使われているかということを探っていきたいと思ひます。2といたしまして、新聞に対する漢字の頻度調査というところに入ります。新聞で使われている漢字というものについては、古くから、戦前から関心を持たれておりました。たとえば「カナモジカイ」という組織であるとか、毎日新聞社であるとか。また近年ではNTTにも朝日新聞で使われている漢字14年分を調査したというものがあり

ます。これらにはそれぞれ紙面照合をしたかどうか、紙面との引き合わせをしているかどうかといった特徴がありますが、その他日本新聞協会さんのほうでも、新聞で使われる漢字の字の形について、近年調査が行われています。また私ども国語研究所におきましては、現代日本でどのくらいの漢字が実際使われているのかということについて、客観的な立場から調査を行っております。まず①といたしまして、現代新聞の漢字というものは、先ほど横山のほうからお話のありました、今から30年以上も昔の1966年のことですが、新聞1年分、朝日、毎日、読売の3紙から、サンプリング調査といたしまして、当時はコンピューターの容量も小さかった為に、紙面から無作為に本文を抽出、抜き出しまして、その抜き出された99万の漢字に対してコンピューターを使って調査をしたのが最初です。9ページにまいます。近年のものですと、「新聞電子メディアの漢字」という調査がございます。これは朝日新聞のCD-ROM、1993年の1年分のデータですが、これを調査したものです。その調査結果というのは、こちらの画面にも出ておりますとおりです。たとえばこの「国」という字が出ておりますが、これは紙面順位、紙面での順位と言うものが、上から数えて3番目である、よく使われる漢字だということです。1年間でCD-ROMの中に167,782回出現したということです。この漢字の使われた量というものが分かるようになっております。また文化庁の国語課というところでは、次のような調査を行いました。漢字出現頻度調査というもので、これは1999年の7月8月の読売新聞のデータを集計したものです。これにはたくさんの文字、2500万字以上が対象となっておりますが、実際紙面を見ておきますと、この調査結果の文字と調査結果に反映されていない文字というものが見つかります。たとえば、この画面にでております、「ヒラセ」(平勢)という苗字で、この方の苗字は実際紙面に出ているのですが、この頻度調査の結果では、「勢」どこを見ても見あたりません。つまりこれは、紙面に出了のだけれども、その日限り、あるいは新聞社にとって臨時に作られて、2~3ヶ月だけ保存しておくという文字であり、その結果、コンピューターで集計したときに、頻度が0になってしまった、そういうものです。そういう類のものが、少なくとも25字は見られる。これ(羿)は「ゲイ」という中国伝説上の人物。弓の名手の名前ですね。また、たとえばこれは、歌舞伎の題名、外題ですね。「三浦大助紅梅(鞆タヅナ)」。タヅナという字が大変珍しい字であるわけで、これも実際紙面に出てきたのですが、この頻度表の中には含まれておりませんでした。つまり頻度表と言うものも、こういう性質をそれぞれ抱えているということです。次に10ページにまいます。「意外と特徴のある新

聞の漢字。」新聞の漢字というのは、調べてみると、意外と新聞らしさというものをもっております。まず3-1, 字種, つまり漢字の種類ですね。漢字というものは、新聞においてたくさん使われています。これを集計してみますと、93年の朝日新聞で、だいたい40%漢字である。つまり100文字新聞の文字をひっばつてくると、40文字が漢字である。残りは、平仮名がたくさんあり、カタカナがあり、わずかにローマ字や数字があるということになりますね。40%漢字が占めている文章というのは、現代においては大変珍しいです。新聞をたくさん読むと漢字の勉強になるというように思います。ところがここに使われている漢字の種類を見てみますと、93年朝日を1年間調べてみますと、4476種類に収まっております。これは先ほどからの常用漢字1945種に比べると、多いと思われまじけれども、実際、漢和辞典には1万、大きな漢和辞典には5万も漢字が載っているのに対して、4476種類に収まっているというふうにも読むことができます。つまり新聞で使われる漢字は、かなり整理された結果であるというふうにみることができます。過去の調査を見ても、3200種類あまりですとか、99年の読売で4536種類などという数字がでております。各新聞社での方針ということは、先ほどのお話にもありましたので、ここでは省略させていただきます。次に3-2, 使用頻度というところに移ります。新聞でよく使われている漢字と言うことで、「国」という字が先ほどよく使われると申しましたが、各調査結果を比べてみますと、10ページ左下を御覧ください、1番が三つの調査通して、日本の「日」という字でそろっております。やはりこの「日」という字はよく使われる。「日本」、日にち、「日曜日」、会社の名前などにもよく出てくるということでしょうか、トップになっております。そして2番が漢数字の「一」、3番あたりから調査によってばらつきがでてまいりまして、「国」とか「大」とか「十」、「年」なんていう字もよく出てきますね。「人」とか会場の「会」などという字が上位を占めているようです。数字ですとか、固有名詞、新聞に特徴的な用語、政治関係の用語などが反映している結果だと言えらると思えます。この中で特筆すべきことは、1966年の調査では、1983位、だいたい2000位ぐらいであった「狙」という漢字があります。狙撃の「狙」という字ですね。獣偏の字です。これが1993年の朝日や99年の読売では、800位ぐらいに順位を上げている。つまりわずか30年足らずの間に順位を1200位上げております。これは先ほどから話がありましたが、常用漢字の表外字です。そして先ほどお話がありましたように、1981年に新聞協会が常用漢字表外字だけれども、新聞としては使いますと宣言した漢字ですから、この結果は当然かもしれません。1200番も順番をあげた、大

変な文字であるわけです。11 ページに移ります。もう少し数字をあげておきます。新聞の漢字というものは、整理されていると言うことですが、たとえば上位 500 種、「日」という漢字が 1 番でしたね、2 番が数字の「一」である、そういうものを上から 500 番まで挙げていく、そしてそれだけでそのぐらい全体の漢字をカバーするかとということを調べてみたところ、だいたいたった 500 の漢字で漢字全体の 79.4%、8 割近くをカバーしています。上位 1000 種類の漢字になりますと、93.9%、つまり同じ漢字がくり返しくり返し出てくるということが、新聞の漢字の特徴として言えます。雑誌などに比べてもそういう傾向がはっきりしています。また常用漢字表という観点からみると、1993 年の朝日では、常用漢字が 98.5%、これは種類ではないんですが、延べ回数で見ますと 98.5% をカバーしているわけです。この他に固有名詞ですとか、専門用語であるとか、だれか他の人の文章を引用する、そういうものは、勝手に表記を変えることは難しいわけですね。それですから、98.5% という数字は、かなり高いものだと思います。また頻度調査の結果、面白いことが分かりましたので、ちょっと紹介しておきます。93 年の朝日新聞で、1 回だけ現れた漢字というのがあります。これは 5000 万字ぐらを集計して、そのうちで 1 回しか使われない漢字。たとえば日常生活でスーパーなんかでも目にします「葱<sup>ねぎ</sup>」という漢字、これは、1 年間で 1 回だけ、逆にどんな記事に出てきたんだろうと、興味深く思いますが。また割烹料理の「烹<sup>ぼう</sup>」という字。これも外を歩いていると目にしますが、1 回しか出てこない。珊瑚礁の「瑚<sup>ご</sup>」も 1 回。「釦<sup>ぼたん</sup>」、これも駅や洋服店などで見かけますが、新聞で見かけることは大変難しい。またノートとかコンピューターでよく見る罫線の「罫<sup>けい</sup>」、これも 1 回。文学で見る人偏のついた「倅<sup>さち</sup>」、サチという字ですが蓄<sup>しよく</sup>、心のついた「愆<sup>よく</sup>」、こういう様な漢字が 1 回しかでてこない。また 1 年間で 1 回もでてこないもの、常用漢字表の「朕」という漢字。これは 99 年の読売でもやはり 1 度もでてきませんでした。ただこの調査以外の新聞を見ているとやはり出現はゼロということではないようです。それから、レアなケースなのですが、頻度表を眺めていると、大変不思議な文字がこの中に混入していることがあります。たとえば 99 年の読売調査には馬へんに洲<sup>しゅう</sup>、という字が 1 回現れたというふうに出ております。これは当時の読売の関係者の方に御協力をいただきまして、地方版のコピーを見せていただきました。これがそうなんです、静岡東部・伊豆版にでてきた、投稿された短歌ですね。「包丁さばきも少し駟<sup>し</sup>れたり」、ルビもついていないので、実際なんと読んでいいか、実はちょっと微妙なんです、文学作品ということのでてきます。「駟<sup>し</sup>れたり」、どうもこれは馬へ

んに川という漢字を、これなら「馴」という漢字があるわけですが、この変化した形、誤りといってもいいのかもしれませんが、これがワープロで使えるようになっておりますために、このまま紙面に現れてしまったのだらうと推測されます。これは非常にまれなケースですが、こういうものがたまたま調査に引っ掛かることがございます。次に3-3, 字体の特徴に移ります。新聞社による字体の違いということですね。これはちょっと飛ばしまして、4行目に栃木県の「トチ」という字があります。ここのプリントを御覧いただけますでしょうか。3-3(1), 新聞社による違い。その4行目です。「トチ」は読売新聞などの字体ですが、朝日新聞などでは、「栃」(右上が一)と社によって「旁」の第1画の形に違いが見られます。これは、間違い探しのようなのですが、ちょっと大きめにしてあります。左の「トチ」と右側のほうにある「栃」。旁の第1画が斜めになっている。書く形と方向が違うわけですね。これはどちらが正しいのか私どももよく分かりません。栃木県としては、どうも斜めのほうを使うことが多いようですが、社によって違いがあるということです。また(2), 常用漢字なのに旧字体を使うというケースが、本当にまれなのですが、確認されます。12ページに書いてありますね。これもちょうど読売の頻度調査が行われたときにできたもので、これはちょっと見づらいなのですが、「癒着」の「癒」、病だれに人を書いて一を書いて、月のようなものを書いて、りっとうを書いて、心という「いやす」と文字が出ているわけですが、その同じ記事の見出しには古い字体が入っておりました。これは伺ったところ、見出しの活字が古いままになっているのだというお話でした。また(3), これも非常にまれなケースです。常用漢字などに異体字が使われるケースがあるようです。これは何かの事故であろうと思われませんが、たとえばこの例は、事務局の「事」という字が普通に常用漢字の字体が入っていますが、この先には、なんと手書きのような「コト」という字(事)が入っておりました。これも実はJIS漢字、経済産業省が作り出したワープロ・パソコンででてくる漢字の第2水準というところに、この字が入っている事自体が実は不思議なことで、これが、いたずらをしてしまった、このいたずらの結果、こういう面白い字体が紙面に出てきてしまう、そういうことがまれにあります。また「畳」という字、本当であればタンボの田の下にいきなりわかんむりが来るのが常用漢字の字体なんですけど、手書きだと世代によってはこの間にタンボの田をもうふたつ書く。タンボの田を合計三つ書くわけですね。が、このチョンチョンという省略記号で表される(畳), これもワープロ・パソコンの文字として入っているものですから、こういういたずらが紙面の上にも現れているということ

です。こういうものは、本当に新聞を読んでいてもめったにあるものではありません。ここに挙げているので、毎日のようにこういうのが出ているんじゃないかと思われるかもしれませんが、これは意地悪な目で見るとこういうものが1年に1回、あるかないかというぐらいのもので、校閲部の方々がこういうものを毎日取り除いておられるのです。(4) 表外字なのに新字体ということがあります。これは2000年12月に当時の文部省の国語審議会というところから、「表外漢字字体表」というものが答申されました。これは常用漢字にない漢字の字の形を決めようとするものです。基本的にそこに康熙字典体(旧字体)とありますが、伝統的な字の形で統一しましょうと、表外字は伝統的な古い形で印刷するようにしましょうという方針を示したものです。新聞ではこの字体表とやや異なる字の形も見られます。そこに挙げてありますのは、J I S漢字と同じに略しているものとして、たとえばさんずいに売るという字、これは冒洗の「洗」という字として使っている新聞社が複数あります。また森鷗外の「鷗」という字が口三つのところがぼってんになっている。また「飴」という字の左側の食偏、食べるという字の部分ですが、これも実は漢和辞典等を見ますと、左下の部分がやや違う形になっております。これは多くの新聞がこのプリントにあるような形(飴)で印刷をしているようです。また新聞は略字が多いという指摘がある反面で、J I S漢字と呼ばれるものに比べて古い形を使っているというものも、もちろん見られます。またJ I S漢字よりも大胆な省略をしている、たとえば青春を謳歌するという場合の「謳」という字が、森鷗外の「鷗」のように、ぼってんになっている。またあまり使わない字ですが、「瘡癩」、伝染病のことですね、「癩」という字が、「萬」という字をこういうように拡張して略字(癩)にしている、こういう新聞社もあるようです。また「舅」という字の上の部分を「旧」というふうに省略して新しくしている、そういう地方紙もあるそうです。また読売新聞の東京版では、「蠣」という字が日によって新しい形になったり、古い形になったり、そういうものが見られるというケースもあります。(5) 異体字というところですね。これは人名、地名などの固有名詞に、「澤」とか「國」とか「嶋」など、これは本人が「私はこちらの字なんだ」と強く主張されることがあるそうですから、新聞社の方もだんだんそれに従って表記するというふうに変ってきているようです。13 ページにまいります。最後に表記の特徴について簡単に御説明いたします。基本的に先ほどからお話がありますように、常用漢字表に従う。たとえば「列車がこむ」というときの「混む」は、常用漢字によると混雑の「混」を使うのではなくて、入り込むの「込」を使うことになって

おります。ところが実際、たとえばCDの歌詞カードであるとか、小節であるとかというものを見ると、この混雑の「混」という字を使ったものが圧倒的に多いようです。ところが新聞社のほうでは、常用漢字に従った、このしんのように入るという字を当てるようにしているようです。また、(2) 漢数字、新聞報道には数字が多く出るわけですが、漢数字を使うという傾向からだんだん最近アラビア数字に変えるという動きがあるようです。従って漢字調査第2位に入りました「一」という字も、また調べてみるともうちょっと下になっているかも知れません。また調べてみたいと考えています。(3) 略記。たとえば国の名前ですが、「英米」であるとか、「印パ」の「パ」が漢字で書かれないというのがあります。またロシアの「露」、また難しいのになると、人偏に白い(伯)と書いて、ブラジルの略記ですね。またカリフォルニア州に限っては、「加州」と漢字表記が現在でも新聞社によっては残っているようです。また「米」という漢字は、食料の米はカタカナで、むしろアメリカを表すために、新聞では使われる頻度が圧倒的に高いようでした。(4) 交ぜ書きについては、これも先ほどお話がありましたので、これは省略させていただきますと思います。(5) 書き換えというところ、これも常用漢字の表外字を表内字に換えるという工夫の一環です。たとえば「あの人は貫禄があるなあ」というときの、「貫<sup>ろく</sup>禄のある」、貫禄の「禄」の字が表外漢字なので、表内字の同じ発音のかねへの「録」に変える、こういうことがなされています。これも違和感があるという人が一部にいるようですが、どうなっていくますでしょう。最後のページになります。先ほど、京都新聞のお話がありましたので、ここでは通過します。(6) 記号ですね。ここで、くり返し記号が出ております。ここにも新聞による特徴があります。たとえば毎日毎日というときに、くり返し記号(「々」)を2つ並べるという新聞もありました。これは今では毎日新聞ももう変えてしまったということです。なお、新聞の案内広告の欄には、不思議な文字が見られます。これは現代に残った合字というものですが、これ、読める方はどのぐらいおいででしょうか。これは今年の新聞でも見つけました。これ、いかがでしょうか、読めるという方、おいででしょうか。あ、おいでですね。あ、そうですね。この会場は御存知の方が多そうですね。これは江戸時代においては、もう当たり前のように出てくる、古文書なんかにはよく出てくる、平仮名の「よ」と「り」がくっついた字ですね。ところがこれは、大学で学生なんか聞いてみますと、読める人、100人いて一人もいなかったりします。新聞広告で、人に伝わってないものがあるとすると、広告の意味としてどうなのでしょう。これも新聞に特徴的な一つの、漢字ではありませ

んが、文字ということになります。終わりに、に入ります。以上のように、新聞ではどのような漢字が使われているかという調査は、様々な漢字使用の実態を明らかにする手がかりとなります。新聞で使われている漢字は、おおむね常用漢字表によったものであるわけですが、現実にはたくさんの文字を運用するメディアとして、新聞固有の特徴、各新聞社特有の特徴を持っていることが伺えました。国語研究所では、新聞だけではなく、雑誌等の漢字についても調査を行っております。我々日本人の文字生活、文字を使った生活で、実際に流通してきた文字、これはなかなか普段自覚することは少ないのですが、我々は出来るだけこういう調査を通しまして、私たちが日々目にし、使っている文字は何なのか、どういうふうにするのが我々の文字生活を豊かにするのか、ということの調査を続けております。以上です。どうもありがとうございました。

**司会** 10分ほど時間が延びておりますが、次の始まりは休憩を5分早めまして、25分からとさせていただきます。今の話にありました、踊り字のこととか、そういうことを盛り込んだ「ことば」シリーズなども、こちらで展示しておりますので、これも御覧ください。ではしばらく休憩にいたします。

<休憩>

**「漢字の質問あれこれ」山田 貞雄 道浦 俊彦 (配布資料：p. 15)**

**山田** 今日は来ていらっしゃる方が皆さん詳しい方なので、あらかじめ御質問をいただきまして、それも交えて、常日頃の私ども国語研究所が答えている答えも入れて、構成を考えました。私は、国立国語研究所に来ます、言葉に関する質問を担当している山田と申します。さて道浦さんは、番組の中でも、言葉のことにたくさん触れていらっしゃいますし、ホームページの中に、言葉に関するエッセーも3桁にのぼるんですね。

**道浦** 900ぐらい。この時点で、エッセーは3年半です。番組では4年半ぐらいです。

**山田** そうですか。もうすぐ4桁ですか。で、書いてらっしゃって、お話をしていると次から次に言葉の問題、言葉の用例がでてきて、いろんな話題を出していただけるので、今日お手伝いをいただくことになりました。まず一つめの御質問ですけれども、「司」と書く「司令塔」と、「指」と書く「指令塔」についてです。これはワールドカップで、サッカー選手のこと、いろいろな報道でたくさん出たときに、この両方が出てきた。これを同音異義語であるのかなと思った人もいるでしょうし、私どもから言いますと、この下の段にあるように、文字と語、あるいは語彙<sup>い</sup>と、漢字本来の意味、言葉になったと

きの用字や用法，更に「昔はそうだった，由来はどうである」と言うような，時代の傾向や変化といった問題を含んでいる問題として，これは面白い質問だということで，取りあげさせていただきました。道浦さんに時々お話を頂くので，ちょっとバーの椅子みたいなのがありますので，そこにちょっと失礼して腰掛けます。それで，「シレイトウ」に関しましては，私どもの研究所に質問をいただいたものです。お答えとしては，左側が「司」のほうの司令，右側が「指」のほうの指令，そして「シレイ」と言いましても，軍隊や，今でも消防でつかわれる「指図役」。人とか役目をいつているものと，命令の中身，指揮系統の指揮，あるいは仕切る内容，これを指しているもので，元々が違うわけです。それで，司令官とか司令長官とか，司令塔もちろんそうですが。司令部というようなものが，軍隊用語を経て使われていて，それが司令塔という実際のものの塔と言うものから，何かの中枢部と言うようなたとえに使われているわけです。実際にそれがどうかと言いますと，左側の「司令塔」は，もちろん圧倒的に多くて，同じサッカーの話題で，これはこちらの懇談会の方々の中の，ある新聞社の新聞の記事です。右も左もそうです。右と左は，ちなみに違う会社の新聞ですが，どちらもやはり出てきてしまっているというんでしょうか，出てきています。それで，本当はもちろん御存じのとおり「司」のほうなんですけれども，最近は「指」のほうを使うことが出てきました。そしてその割合としては，こんな数になっていると。

**道浦** これの数字，30800件という「司」のほうと，「指」のほうが8500件。こういうのは何を基準に。

**山田** これは今簡単にインターネットというので，その言葉をいれてやって探させると，何件ヒットします。なん件探し出せましたというのを，自動的にやってくれるものがあるんですね。もちろん私ども専門家から申しますと，この実数30000と8500，これが実数で，その対比でどういう意味だということを，直接に結論付けるのはちょっと難しいと思うんですね。

**道浦** つまり，インターネットの中で，この「シレイトウ」というそれぞれの字が使われている件数が，かたや30000件，かたや8000件。

**山田** はい。インターネットというのは，もちろん新聞各社のものとか，番組の内容を簡単にしたものとか，そういう公の性質なものもあるし，自分が勝手に日記を書いて，それをホームページに出している。自分の日記帳の中を出している面と，いろいろな文章が交じっていますから，そういう意味では，何の件数ということと，この件数にどれ

だけ意味があるかということは、今後ももちろん課題のあることなんです。ただ、今の一つの現状は、一つの切り口だとこんなことですと。

**道浦** スポーツ新聞に、当然こういう字が、一般の新聞もスポーツ面にでてくると思いますが、スポーツ新聞の場合、けっこう、たとえば「中田、みせた」と言うときの「みせた」を魅力の「魅」を使って書いてますね。本当は見せるんだから、「見る」ですよ。見学の見であるはずですけども、あえてそういう、文字の駄洒落<sup>だじやれ</sup>と言いますか、お遊びで使うという面もありますよね。

**山田** 今回もあらかじめいただいた質問の中に、「連勝した」というのを、勝ち越したとか、勝ちが続いていると言う、「連なる」「勝つ」が、「連なる」「笑う」と。こういうものが、あて字が多いんじゃないかと。

**道浦** 学校のテストで書いたら、絶対×になりますけど、雰囲気はよくわかりますよね。

**山田** そうですよ。この相撲の「連勝」も、横行していると。

**道浦** こんなこといったら、今日スポーツ新聞の方もきていらっしゃるんですけども、小学校時代にスポーツ紙ばかり読んでいた子供がいたら、学校の書き取りテストで「連笑」と。「だって、新聞に書いてあったもん！」ということになるかも分からないと思いますけれども。

**山田** この下にある「絶対的」というのと、「絶体絶命」。これももちろん数が多いほうが、数が多いから勝ちというわけではないんですが、本来こちら、左側なんですけど、もちろん数はとても少ないですが、みんなが開いて見られるインターネットなどでは、ああいうものもでてきているんですね。

**道浦** こちらの「絶対」間違いのほうの「絶対絶命」、「体」じゃないほうですね、これを書こうとすると、多分ワープロで変換するときは、「絶体絶命」と打って、1回変換すると、正しいほうがでると思うんです。この間違っただけを打つと、「絶対」を先ず変換して、その後「絶命」を打ち込んで変換するという、2回作業しなければならない。

**山田** 一つの使い方の間違いとか、ある意味では誤変換ですかね、そういう意味があるかも知れませんね。

**道浦** たとえば我々でも原稿を書いたり読んだりするときに迷うんですけど、「たいせい」という言葉、ここに書いてあるように、「体勢」「体制」「態勢」とか。「飛行機が着陸態勢にはいりました」というときに、どの漢字を使うか。なかなかすぐにパッと言えるか

という、多分これは3番目のだと思うんですけど。それから病院では、「救急患者の受入態勢ができています」これは迷いますね。システムとしての「体制」であればまん中ですけれども、もうこのシステムが出来ている段階で、今「大丈夫？急患入れる？」というふうなときの「態勢」だと後ろのほうになると思いますし、非常に文脈によってどの漢字を使うかというのは、問われると思うんですね。

**山田** 1番最後の「態勢は、身構えのようなことをいっているんですよ。同じ体の状態であっても、1番手前の、体の勢いのほうは、本当に文字どおりの体の姿勢とか、構えのときに、スポーツ、特に相撲なんかで使うときは、こちらですよ。

**道浦** そうですね。

**山田** 「あげる」というのでも、ぱっとあげただけでも、この三つでできますね。私はよく電車に乗ったときに、駅のエスカレーターの「上り下り」がどういう字でかいてあるかとみるんですが、「上下」で書いてあるのもありますし、「昇降」で書いてあるのもありますし、平仮名で書いてあるのもある。出張に行ったときなんか、東京はどうかとか、九州はどうなのか。あまり地域差はなくて、同じ駅でも離れたエスカレーターで別の書き方をしているところもありまして、そうすると「昇降」と「上下」、意味の違いはいったいどうなのかなんて、考えてしまうんですけども。

**道浦** たとえば「国旗掲揚」と、「日の丸を揚げます」とか、あるいはオリンピックで旗が揚がったというときに、こちらの「掲揚」の「揚」を使うわけですけど、真ん中の上を使ったからといって、それが間違いかなと、そういう問題ですよ。

**山田** 例の不審船の引き揚げ作業のときに、自ら揚げる場合は、「揚」を使っているところが多かったんですけども、中には「上」を使っているところもあったかもしれませんね。

**道浦** 結局、「列举」の「挙」のように、例を挙げるとか、あるいは、「挙式」の「式を挙げる」とか、そういうふうに漢語があって、特別な使い方があるものは、それを使えばいいわけですが、「上」のあげるのようなものは、意味の範囲が、使える範囲がすごく広いんですよ。「上」のあげるの中に、「揚」のあげるとか、「挙」のあげるも含まれることがあるということですね。

**山田** そうですね。ですから意味は、どれにしようというふうに、みんな並んでいるように皆さん思うんですよ。どれがいいですかって、よく電話で聞かれるんです。そうすると、「上」はもっと広いのでこれにもこれにも使えますと。ジョーカーのようなもので。

道浦 「JOKER」と「上」の) シャレですか？

山田 それで、他にも細かい用字がありますよ。それを調べていただくのに、たとえば漢和辞典の同音異義語の書き分けというのが、後ろについているんですね。それが日本語においてどうかというと、そこまでは区別しないということもあるんですね。ですから国語辞典で、書き分けを書こうとしている傾向があるのと共に、漢和辞典で、日本語での書き分けについて、少し書き換えてくれたらいいな、と思うようなところもあるんですね。漢和辞典の同音異義語は、漢文のテキスト中でどう書き分けられているかということの知識に基づいているので、必ずしも私たちの日常生活の日本語における漢字の書き分けに合わない面もあるんですね。

道浦 はい。

山田 次に移りまして、これですね。先ほども更迭の話がでましたけれども、「迭」の字の問題ですね。これは表外訓で、表外の音訓ですので、使い慣れない言葉であるけれども、一旦話題になれば普通になるというような問題ですね。実際、先ほどのような調査をしてみると、こんな対比になるのですが、むしろ右側のところの仲間には、市町村の条例とか、そういうものが含まれていたりするんですね。

道浦 更迭の「迭」の字は先ほどお話がでた、表外訓にあたる。

山田 そうですね。この「迭」という字が、「送」という字に似ていると。辞める人を送るなんていう、ちょっとだぶったりなんかするというので、この「替える、代わる」という本来の「迭」の字の意味、訓ですね、それを私たちは知識として持っていないので、誤解があったりする。

道浦 本日御出席の皆さんは、当然じゃないかと思っていらっしゃると思いますが、「こうしつ」とか「こうそう」とか読む方もけっこういらっしゃると思います。

山田 そうですね。もうひとつは、ここの校閲部の方が調査して下さった、昔の新聞などと比べると、今の新聞、あるいは報道では、「クビになる」という言葉の、改まった言い方として、「する」「される」ですね。受け身の形がでてくるという話があるんですね。それは「更迭」というのは、誰を誰に入れ替えるとか、誰のポストを入れ替えるという意味なので、入れ替えられた人にとって、「クビになった」という意味を表すのは、本来の意味ではないのですね。

道浦 そうすると、「更迭」というのは、イメージの上では「クビ」に近いと。そういうイメージがついてしまったことで、「される」という、本来使われない受身形の形もでき

ているということですか。

**山田** のように見えますね。同じように、ニュースの言葉がいろいろありますが、報道ではいかがでしょうか。

**道浦** ちょうど本日、御出席の明石のかたで…。

**山田** みなさんから御質問をいただいているんですが、その中に、新聞での「ら致」と漢字の「拉致」の使い分けの根拠はどうなんでしょうか、という御質問があったんですね。「拉致」の「拉」の字が、先ほど出ました表外字だったんですね。それでずっと使われなくて、金大中さんのときに使われて、また使われなくなって、すたれていくという事情があったというような歴史がありますけれども。ここ10年ぐらいは、あまり漢字のほうは使われてなかったんですが、やはり最近、昨今の情勢がありまして。ちょうど関西の用語懇談会に所属している、24社のアンケートが先ほど出たところだったんですが、この「拉致」を平仮名で書いている人は、関西では今一社もありませんでした。全部漢字になっています。ただこの「拉」という字を見てみますと、「拉致」以外に、どんなときに使うかと。「<sup>ら-めん</sup>拉麵」くらいしかないんですね。全然イメージが違うんですよ。「拉麵」を漢字で書くと、本格的な中国料理のような。

**道浦** 中国に「拉麵」があるのか？という話もありますが。

**山田** だからほとんど「拉致」のときにしか使われないであろう漢字なんですけど、これだけ新聞、報道紙面にでてくることになると、皆さんもう読めるということで、使うようになってきております。その下。これもなんか、最近ずっとなんですけど、北と「北」。同じじゃないかと。違うんですね。よく見ていただくと、二つ目の北はかぎ括弧がついております。かぎ括弧のついたほうの「北」というのは、新聞で最近「北朝鮮」の略称として、見出しでよく使われています。使っているのは、読売新聞さん、産経新聞さんだと思いますけれども。他の新聞社さんはほとんど使ってらっしゃらない。今日、朝日新聞さんが、5日ほど前の社説の見出しで、かぎ括弧を使わない北を使ってらして、ちょっと驚いたんですけども。かぎ括弧を使わないで北といった場合には、だいたい北の大地に観光とか、北海道を指すことが多いんですね。北というイメージは、たとえば歌謡曲のタイトルでいいますと、「北の宿から」「北酒場」「北空港」「北の漁場」「北の旅人」これは全部、北朝鮮を指しているわけではございません。なんとなく北国という漠然とした、東北地方から北海道あたりですかね、そういったところをイメージしているんじゃないか。つまり漢字は同じなんだけど、かぎ括弧をつけたりすることで、別の意

味を持たせる略語ですね。そういうイメージも出てくるということです。

道浦 カタカナのキタと違いますよね。

山田 カタカナだと「これから行こうか〜」という。ミナミとか。「キタ行こうか」といって、そのまま北海道へ行っちゃう人はまあいないという。

道浦 大変なことになってしまいますけど。

山田 北の故郷は、今度のニュースでずいぶん出てきますけど、「故」は「温故知新」という言葉があって、新に対する故なんですよ。

道浦 つまり古いという意味をもっているわけですね。

山田 もちろん古いんですが、なじみがあるというほうなんです。古びてしまっているほうではないんですね。それに対して、こちらの「古」、両方古いんですけど、この場合は、古今集の「古」ですね。「今」と対になってるんですよ。ですから、「新しい」と対じゃなくて、「今」と対になってるんです。

道浦 それで、例の拉致被害者の方が、日本に帰ってきて、それぞれ新潟、福井、故郷へ戻られた日の見出しが「故郷」と「古里」両方でしていたんですけども、「故郷」と書いて「ふるさと」と読ませる読みが、この常用漢字表の訓の読みの中にないんですね。「ふるさと」と読ませたいと思うと、どうしても簡単なほうの「古」、古今のほうの「古里」になってしまうという事情があったんです。

山田 でも私のほうから見ると、この真ん中は、こんなにひなびた、古びたところだったかなという気持のように見えるんですね。懐かしい、あのふるさとというんだったら、こちらの「故郷」か「古里」、これは中国の漢詩にもある言葉なんです。

道浦 これはちょっと見られないですね。

山田 それは「古里」というので、「ふるさと」という言葉はあるわけです。それはこんな汚い古びたところだったかではなくて、懐かしい、あのなじみのある、私の故郷、ふるさとという意味なんですよ。

道浦 この「故」と読むのからいうと、なじみという感じもちょっとしてきますよね。

山田 さて、次にちょっと急ぎますね。これはとても特殊な言葉で、「はちあらい」という言葉をお使いになる方はいらっしゃいますかね、ここで。私どもの研究所に実際に質問の電話があったんですけど、私も絶句しまして。結局、おみこしを担いだ人たちが、乾杯をして、「なおらい」とはちょっと違うようなんですが、打ち上げのようなものですね。

「いたあらい」とか「座敷はらい」とか、いろいろな方言があるらしいんですね。その

「はちあらい」の字を聞かれたんです。ここで言いたかったのは、先ほどの、新聞の用語でもでしたが、専門の言葉とか、方言だとか、使う人や使う場面、使い分けが限られている言葉について、言葉あるいは字という問題なんですね。上二つは、もう説明するのは無理かもしれないかもしれません。「くう」(腔)というふうには読まない字を、「くう」と読むようにしているものですね。お医者様のほうが患者さんのことを思いやってか、馬鹿にしてか、「コウクウ」と呼びましようよと言っているそうです。それから次のほうは、私どもの研究所などで、ハンコをいっぱい押すと、書類の束の一番上のページのことを指す、「鏡はどっちを使いますか」と。多分これは面と向かうというので、鏡台の「鏡」、手鏡の「鏡」なんだろうと思うんですがね。下のほうはどうですか。

**道浦** 「遺言」。一般的には「ゆいごん」だと思いますけれども、法律用語としては「いごん」と読むのが正しいんです。それからその下の、「競売」これも一般的には「きょうばい」にかける。オークションですね。けれど法律用語では「けいばい」と読みます。ただ、ニュースの場合にこれを読み分けすると、テレビのニュースの場合は、耳で音を聞くことが多いですよね。だから耳から入ってくる話し言葉としては、この区別は難しいのではないかということで、読売テレビ、日本テレビ系列では、共にこれは「ゆいごん」「きょうばい」というふうに読んでおります。ただ会社によっては、しっかりと法律用語の場合は、「けいばい」「いごん」というのを使っているところもあるかと思いますが、それほど数は多くありません。読み分けというと、次の質問で、こういうのがあるんですよね。これはどうですか。「十本」は「ジッポン」「10%」は「ジュッパーセント」、わかりますよね。「ジュ」か「ジ」かという。「ジュッポン」なのか「ジッポン」なのか。「ジュッパーセント」なのか「ジッパーセント」なのかということなんですが、これは便利なものがあるんですね。国立国語研究所発行の新「ことば」シリーズ14『言葉に関する問答集—よくある言葉の質問—』という、去年出た本なんですが、これの30ページにしっかり答えが書いてありますので。今日販売してるんですよね。回し者ではごさいません。実際、報道の現場でどういうふうになっているかと言いますと、正しくは辞書を引くと、全部「ジッポン」、「ジッ」と書いてあるんですよ、「ジュ」じゃなくて。だから「ジッポン」「ジッパーセント」というふうには、私も会社に入ったときには、教わったような気がしますけれども、現在入って来るアナウンサーの研修とかでは、「ジッポン」という人はおりませんね。「ジッポン」と言えといっても「え、なんでジッポンなんですか」これは本当は、「ジュウ」は「ジウ」だから、これを活用させて促音便になったのが「ジ

ュッポン」だから「ジッポン」なんだよと、「ジュウ」じゃないんだよといっても、「ああ、そうですか」といって、「ジュッポン」と言っております。現状としましては、「ジュッパースセント」「ジュッポン」という人が多いと思っております。

**山田** 慣用音というふうに書きましたけれども、漢和辞典などではこういうのを、慣用音としても、あるものだと決めている場合もあるんですけど、実際は今おっしゃったような口の働きたか、言い習わしたか、こういうことで変わってきていることなんですよ。

**道浦** はい。ただ、そう入っても、たとえばこういう言葉で、「十手」それから東海道中膝栗毛の「十返舎一九」これを「ジュッペンシャイック」と読むのはやめようねと。これは固有名詞的なものですから、「ジッ」というふうに読みましょうというふうには。これはどっちでも良いではないんです。というふうに教えております。そういう数の言葉でいいますと、たとえば2番目にでている、五つの色と書いて、これは何と読みますか。「ごしき」「ごしょく」、「ごしき」と「ごしょく」では意味がちょっと変わってきます。任意の好きな色五つ選んでと言うなら「ごしょく」、「ごしき」というと、いろんな色というふうな意味合いもでてきます。「ごしきのたんざく」、あれはいろんな色がたくさんあるよということなんですよ、具体的に5という数字ではない。また「ごしき」といった場合に、昔から言われている色というのは、「赤、青、黄色、黒、白」という、この「五色」、決められた色であるというふうな、これは中国から入ってきたものですが、そういうふうな意味合いを持っています。それから実際のニュースで、助数詞との組み合わせですね。火事の際に、「一棟」焼けました。「二棟」焼けました。さあ、これは「みむね」焼けたんでしょうか。「さんむね」焼けたんでしょうか。「みむね」だと思われる方はどのくらいいらっしゃいますか。はい。では「さんむね」だと思われる方。ああ、そうですね。現状から言いますと、もう「さんむね」と読むことがほとんどですね。ただやはりちょっと趣のあるようなもの場合には「みむね」と読むこともありますけれど、そうすると「ふたむね」のところを「にむね」と読むやつがでてきたりしますから、ややこしいということもございます。

**山田** 助数詞のこととか、発音のことは、やっぱりどっちが正しいんですかというふうに聞かれることが多いですね。先ほどの「ごしき」のように、意味が使い分けられるものは別として、やはりそれは人一人の中でも、どっちに言うか意識しないときもあるし、人によって違うかもしれないし、それを大きく言って、「ゆれ」と言っているわけですね。どちらかに定まっていない、あるいはこのときにはこっちだということを、はっきりい

えないものも、言葉の問題には多いということなんですよ。

**道浦** この場合ですと、「1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10」というのは、漢語系ですよ。「ひとつ. ふたつ. みっつ」「ひい. ふう. みい. よう」これは和語、その両方があるって日本語の数を数える。さらにさっきの「ワン. ツー. スリー」とか「アン. ドゥ. トロワ」とか。いちご「いちパック」なのか「ひとパック」なのか「ワンパック」なのかといわれると、「うーん、どれも正解」というようなケースもありますし、それからものをふたつずつ数えるときに、「に. し. ろ. や. とお」と言ったり、「に. し. ろ. は. とお」と言うのかというのを、いろんな人に聞いてみたんです。これ「に. し. ろ. は. とお」と読まれる方はどれぐらいいらっしゃいますかね。「に. し. ろ. や. とお」という方は…。これ私も調べました。47都道府県の放送局のアナウンス部に電話しまして、そちらではどういうふうに言ってますかというのを聞いてみたところ、なんとピタッと分かれたんです。東日本のほうは「に. し. ろ. や. とお」西日本のほうは「に. し. ろ. は. とお」というふうに。きれいに分かれましてね。中には、「とお」のところを「じゅう」という方もいましたし、福井県とか佐賀県で「に. し. ろん. ぱ. とお」とか「に. し. ろっ. ぱ. とお」とか「ろく」で撥音便になったり。いろんな言い方があるもんだなと思ひまして、その地域差もありますし、漢数字、和数字、英語、色々入ってきて本当に難しいんです。

**山田** その次なんですけど、ちょっと時間がないので、これは簡単にいきますが、「気持」と「気持ち」というのは、テレビの字幕、あるいは映画の字幕で御質問をいただくことがあるんですね。見た人から聞かれたケースですけども、この場合はNHKで独自にこうしようというルールを決めていらっしゃるものは、先ほどの漢字表の「送り仮名の付け方」という規則とは、ずれているものがあったり、あるいは同じNHKの用語の中でも、「所帯持ち」「子持ち」「妻子持ち」等、言葉によっていろいろ送りがなが違っていたりとか、そういうことがあるんですねというお話です。ちょっとこれはスキップさせていただきます。その次ですけども、先ほどの書き換え、仮名で書くか、違う字で書くかという問題です。この画面はちょっと工夫がありまして、二つのことを言っております。ちょっと集中していただきたいと思います。まずこの上の「鳥瞰<sup>かん</sup>」なんですけれども、この真ん中の「瞰」の字は表外字なんですよ。ですから表外字を平仮名で書く。御質問にもいただきました。「山麓<sup>ろく</sup>」というのが、テロップで一部が「山ろく」と書いてある。やまろくと字面で出てくる。これは新聞などにも、子供に触れてもらおうという

気持ちは分かるけど、教育上は逆効果じゃないだろうか。むずがゆくてしょうがないと、そういう御質問をいただいているんですが、やはりこのことは先ほどもでてきました。この「鳥瞰図」の場合には、もちろんこの真ん中の「瞰」という字は、見下ろすという意味なんですよ。だから「俯瞰図」とか、「鳥瞰図」のときには、この「瞰」書くんですが、一時、表外字であるから、平仮名で書いたり、新聞用語辞典などでは、見るという意味だけをとって、あの字を書き換えましょうという時代もあったわけですね。ところが私が考えるというか、この頃感じるのは、あまり皆さん、文字は手で書かないですよ。もう選ばれて来たものの中から、これだといって選ぶわけですね。あるいは、ワープロの中には、この漢字はこういう意味ですよ、と選択肢を説明してくれて、その中から選び取りさえすればよい。そうすると表外字の位置づけも変わってきて、見た目にはそれで見分けがつけば、選べる時代になってきたかもしれないですね。

**道浦** 手では書けないけれども、読める字、意味も分かるよという漢字に関しては、それを使おうという流れがちょっと出てきているのではないかと。

**山田** そうですね、だから文字のことを言うときに、大昔は白い紙のところに、へらで削った跡というような文字もあったわけですね。それから墨で書く時代もあったし、もちろん木簡で木に書いた時代もあったし、今やこういうふうには、あまり考えずに選び取ればよいという時代になっているわけで、どうやって書くかという問題と、何を書くかという問題が、関係してるということなんですよ。

**道浦** それともうひとつ何かここに。

**山田** ここで隠されているのは、中学生の「子供」なら「子ども」と書く。逆に「子供」がおかしいというのは、おかしいと。何か判じ物のようなことなんですが、これは共という字を仮名で書くか、漢字で書くか、これは鳥瞰図の瞰を仮名で書くか、漢字で書くかと、まったく別のレベルのことなんです。共という意味は、悪い意味で、見下している感じなので、使わぬほうがいいと。さげすんでいるから共なんだと。だからこれを使うのはいやだというに考える方がいらっしゃるということですね。

**道浦** それで平仮名で書いて、その漢字の意味合いを消そうということ。

**山田** ただ言葉自体は、そういうことまで出来ますので、それだけは替えられないんですよ。「子供」という言葉はもう出来てしまって、それを私たちは使っているんですから。自分の子供がということも言えるけれども、この学校の「子供達」というふうに「達」をつけるんですからね。「達」というのは、さげすんで使う言葉ではないですね。

道浦 「子+ども」じゃなくて、「こども」っていう一つの言葉「子供」になっているんですね。

山田 このことと言いたかったのは、平仮名で書かなきゃいけないというときがこちらの振り子で触れたとすれば、今それはこちらに振り戻されて、漢字でもいいじゃないの。そんなに漢字ひとつのところだけでこだわる必要があるのか、と皆さんが、見直しているんじゃないかなと思うんですね。

道浦 そうですね。結局、表外字以外の漢字を各新聞社は使うようになってきているというのが、もう一つの現れだと思います。

山田 ちょっと先に進みますね。コマーシャルで、SMA Pの草なぎ君の字が、身ごもるというみたいになってしまうんですが、というのがあります。ちょっと御存知でしょうか、「彌」という字をどうやって出したらいいのと、選ぶ時代になってきてしまっているものですが、ここで盛り込みたかったのは、部首というところなんですね。部首についても御質問がたくさんありました。部首については漢和辞典の凡例を読んでくださいと、私は毎日のように言っているんですが、『康熙字典』という中国の清時代の漢字辞典、向こうにしてみれば国語辞典なんですけれども、その部首分類に倣っていますと。一部分替えているところは、断って替えているんですということがあって、しかしこういう国字のようなものはどれにも入らないことがありますよ、ということなんです。もうひとつは、固有名詞の漢字なんですね。

道浦 難しいですね。長嶋茂雄さんの嶋は、山鳥ですね。ジャーナリストの鷲<sup>しほ</sup>さんは、山が上についています。以前、息子の長島一茂さんは、ふつうの島だと、山がついていない島だったんですけど、引退したとたんに、山鳥、お父さんにあわせて替えちゃったんです。個人個人、字に対して想い出というものもあるんでしょう。

山田 そうですね。先ほどのお話にでていたように、自分の字はこの字だからと言って、漢字表の字体ではない字を選びたいと、意識していらっしゃる方もいるんですが、この間、住基ネットで通知がきたと。それに自分の字が書いてあったら、いつも書いている字よりも難しい字が書いてあって、自分の名前はこれだったのかと、初めて気がついたという方、それからもう一つは、お父さんは「斎藤」の古い「齋藤」を使っていたけど、自分は簡単なほうにしたいから改名したと。ところが故郷に帰ってお父さんのお葬式をしたら、故郷に残っている弟は古いほうの「齋藤」を使ったと。

道浦 兄弟喧嘩ですね。

山田 もう私は現代人なんだから、常用漢字にしたいんだと、そういう方もでてきてるんです。

道浦 この中に渡辺さんという方、いらっしゃいますか。今日はいらっしゃらないようです。渡辺の「辺」という字は、なんと65種類ぐらいあるらしいですね。それを手書きで全部、「私はそうじゃない。ちょっと長いとか、短い」とか言われて、「御自分でお書きになりますか」という風になっちゃう。手書きの文字と活字の文字は、そのまま同じではないようです。ちょっと違うよということも分かっているみたいです。

山田 それで、ここに書きました戸籍は、手で書いて届け出されている。それをなるべく近い形で電子化しているのが住民票で、一部それに伴って戸籍も電子化されているそうです。運転免許は警察で、銀行では運転免許があれば金をいくらまでなら貸してくれますよと。でも住民票があると、もっと貸してくれますとか、もっと重要な生命保険だと、戸籍謄本が必要ですよとか、そういうふうと同じ人の身の上に、いろいろなレベルの漢字が求められると、それが困るという話で、私どもも聞いています。漢字には「形」「音」「義」といいまして、形と音、読み方と意味と、今なるべくそれにわたるような質問を取り上げたつもりなんですけれども、形の部分もまだ今でも問題になるんですね。最後に今日は朝日新聞社でやりましたので、先ほどの大堀さんに、ちょっと意地悪で御質問しますが、この「朝日新聞」、朝の字と「新」の字は、なんでこうなっているんですかと、御質問をいただいた方、今日いらっしゃってますかね。お答えがありますので、お願いしようと思います。

道浦 朝の字が手書きで書くのと違います。

大堀 見ていただくと分かるんですが、「朝」という字と「新」という字は、多分学校の書き取りでこう書くと、だめではないだろうか、私も思います。朝日新聞が大事にこの字を使ったのは、<sup>おうようじゅん</sup>歐陽詢という中国の有名な書家がいるのですが、その人が書いた碑文を、拓本にして使っているものだと。「朝」という字、「日」という字、「聞」という字はこの中から直接とれたのですが、「新」という字はその中になかったので、偏と<sup>つくり</sup>旁を別に字からとってきて、合体して作ったものです。今でも実際作字するとき、そういうふうに使っていることが多いんですが、そのときに「新」という字もこの形で合体して作られたので、もともと一本横線が多い。「新」の偏のほうは、「親」という字からとったそうですが、そのときから、欧陽詢の書は、一本横線が多い字だったので、それをそのまま使っているということで、字体というのは、必ずしも一つではないですね。新聞の

「新」は常用漢字表にありますので、あれしか今は使っておりませんが、書き方によってはこういう字体が使われたこともあるという形であります。

山田 そういうことで、お答えでした。それで、私もこの御質問を見たときに、時々御質問に答えるときに、中国での簡体字のことを、日本での先ほどの常用漢字や新聞漢字のことと対比してお話する事が多いんですね。中国での苗字の書き方というのは、日本とはずいぶん違いますよ。日本ではその分、制限漢字の考え方よりは、なるべく広げていこう、使えるようにしようという流れにあるんですよ、ということをお話することが多いんです。

道浦 唐木順三さんが劇作家の木下順二さんと仲良しだったらしいんですけど、木下順二さんがくると、「一本少ない奴がきた」と。順三と順二で、三と二なんで。一本少ない奴なんていうことをよく言われたというふうに、本に書かれておりました。

山田 それで今日は漢字のことを中心にいたしましたので、番外編として外来語のことも、ローマ字のことも少し書きましたけれども、私ども国立国語研究所は6月から外来語の質問の電話というホットラインをやっておりますので、こういう質問はそのときにしていただくということで、今日は漢字のことだけで終わりにしたいと思います。

山田、道浦 どうもありがとうございました。

司会者 ありがとうございました。

参加者1 一つ……。

山田 はい。

参加者1 先ほど、更迭の「迭」は常用漢字じゃないとおっしゃいましたが……。

山田 あ、失礼しました。

参加者1 常用漢字のようですが。

山田 更迭の迭は常用漢字です。

参加者1 詳しい方が多いので……

山田 はい。漢字自体も表外字であると思いこんでおりました。失礼しました。

参加者2 音「テツ」だけが表内音であって、表外訓が含まないということ、間違えて説明したんですね。字はあるんだけど、漢字ではあるけれども、「テツ」の音だけで使うことになっていて、本来の漢字の意味を知る手がかりである訓がないということ、御説明したかったんです。

山田 フォローしていただいてありがとうございます。以上をもちまして、本日のフォー

ラムを終了させていただきます。どうもありがとうございました。最後にお願いがございます。お手元の封筒の中に水色の紙、アンケートがございます。私どもこれからも「ことば」フォーラムを続けて参ります，その際に，皆さんの御意見などを参考にさせていただきます。これからもよりよいフォーラムにしていきたいと考えておりますので，どうぞアンケートのほうに御協力をお願いしたいと思います。アンケートはお帰りの際に出口におります係の者にお渡しください。もうこのまま阪神百貨店，阪急百貨店で買い物をして帰るとちょうどいい時間に帰れるのにと思っている方もいらっしゃるかもしれませんが，どうぞ御協力の程，よろしく願いいたします。それでは，どうも，本日はありがとうございました。

<終了>